1. はじめに

韓国のナショナリズム

3月1日は韓国の公休日「三・一節」[1]である。この日、外出した筆者は、街頭で韓国の国歌「愛国歌」を歌うパフォーマーを目にした。人が集まる大通りは、路肩を警察の特殊車両が固めている。また、若者で賑わう喫茶店では、レジ係りに韓国の国旗「太極旗」のバッジを渡された。このような、韓国の「ナショナリズム」は、ごく当たり前に存在するように思われる。だが、それは、いつかもわからない大昔から存在するものなのであろうか。一般的に「ナショナリズム」とは、「『我々』は他者とは異なる独自な歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みで実現、推進する意志、感情、活動の総称[2]」として捉えられ、近代に入って国民国家の形成とともに芽生えてきたものであると言われる。それでは、朝鮮半島におけるナショナリズムはどのように形成されたのであろうか。

ナショナリズムについてのアンダーソンの研究

ベネディクト・アンダーソンはナショナリズムの起源について研究した。彼は研究の中で、「想像の共同体」としての国民意識の出現に、書籍・新聞の出版が果たした役割に注目している[3]。彼は国民という概念を「日々顔付き合わせる原初的な村落より大きいすべての共同体は想像されたものである[4]」と規定する。そして、母国アメリカの国民を例に出し、以下のように記述している。

「ひとりのアメリカ人は、2億4千万余のアメリカ人同胞のうち、ほんの一握りの人以外、一生のうちで会うことも、名前を知ることもないだろう。まして彼には、あるとき、かれらが一体何をしようとしているのか、そんなことは知るよしもない。しかし、それでいて、彼はアメリカ人のゆるぎない、匿名の、同時的活動についてまったく確信してい

---

[1] 1919年のこの日、朝鮮近代史上最大の反日独立運動である三・一独立運動が始められたことを記念している。
[2] 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学 - 現代日本のアイデンティティの行方 - 』(名古屋大学出版会、1997年) pp.10-11から引用。
[3] ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補・想像の共同体 - ナショナリズムの起源と流行 - 』(NTT出版、1997年) を参考にした。
[4] アンダーソン、前掲書 p.25より引用。

る[5]。」

つまり彼によると、国民国家の出現には、いわゆる同時性の観念が不可欠であり、この観念は出版物を通じて生み出されたものだと言う。例えば小説では、登場人物同士が互いに出会うことはなくとも、同じ社会に所属し、我知らず関わり合う。読者はその様子を神のごとく俯瞰することができる。この俯瞰が読者の頭の中に、新しい想像の世界を浮かび上がらせる。アンダーソンは、新聞も本と同様に考え、その「極端な一形態」であるとする。新聞では、世界中の出来事が日時という基準で構成されている。新聞の印刷は儀式のように絶えず繰り返され、その読者層という共同体の幻想を生む。また、街角において自分以外の読者の姿を目に見える形で確認させ得る。こういった幻想が、近代国民の均質性に対する確信をつくりだしたという。

小論の目的

小論は20世紀前半の朝鮮半島におけるナショナリズムの形成について取り扱う。

本稿で用いる「韓国」と言う語は、現在の大韓民国だけでなく、1897年から1910年の日韓併合まで用いられた大韓帝国という国名をも含むものとする。同様に、「朝鮮」という場合は、李氏朝鮮を指し、現在の朝鮮民主主義人民共和国を指すものではない。

近代とは国民国家ナショナリズムの時代であった。朝鮮半島における近代国家の形成に特徴的であったのは、国民国家という新たな国家イメージの獲得に加え、「中華帝国」からの脱却を必要とした点である。そのナショナリズムの形成過程において、韓国は朝貢国という自己イメージの束縛に苦しむこととなる[6]。三国時代の昔より、朝鮮半島は中国大陸に成立した帝国の冊封体制に組み込まれてきた。言い換えれば、「中華帝国」は、絶えず朝鮮半島に住む者の理想となっていたのである。しかし清の没落とともに、この理想像に動揺が生じた。日本という新興勢力が、朝鮮半島の住民の、あるべき自己のイメージを大きく揺るがせたのである。

小論では朝鮮半島におけるナショナリズムの誕生を、1905年に日韓保護条約が結ばれてから、1910年に韓国併合が行われるまでの時期に置く。その上で、アンダーソンの言う「出版資本主義」が国民意識の形成を促したとする主張を踏まえ、ナショナリズム形成に小説

---

[5] アンダーソン、前掲書 pp.51-52 より引用。

[6] 木村幹『朝鮮/韓国ナショナリズムと「小国」意識 - 朝貢国から国民国家へ - 』(MINERVA 人文・社会科学叢書 39、ミネルヴァ書房、2000年) は、この自己イメージを“「小国」意識”と名付け、ナショナリズム形成に及ぼした影響を考察している。

などの出版が果たした役割を考察したい。

その中でも、大規模な国民運動である国債報償運動の発端となった『越南亡国史』を取り上げる。同書は、20 世紀前半に朝鮮半島で最もよく読まれた書籍のひとつである。この具体的な事例を通じ、アンダーソンの議論を検証する。

2. 本論

2. 1. 国家意識

朝貢国朝鮮の国家意識

韓国の近代は、外国との接触によって始まる。大院君が権力の座につくころ、半島沿岸に欧米諸国の船が姿を現すようになっていた。外国船は開国と通商を要求し、1866 年にはアメリカ商船ゼネラル・シャーマン号が大同江を遡り、平壌市内に侵入した。この事件で同船は平壌の軍民たちの焼き討ちに遭い、乗組員全員が死亡している[7]。これをきっかけに 1871 年、アメリカ艦隊が朝鮮を攻撃した（辛未洋擾）。両国間の戦闘で朝鮮軍は 77 名もの死者を出したが、米軍も 13 名の死者を出したため、開国の強要を見合わせて引き揚げた。この事件は大院君政権による鎖国攘夷政策の成果のひとつとされ、攘夷への自信を深めさせる結果となった。大院君は「洋夷侵犯するに戦いを非とするは則ち和なり。和を主とするは売国なり[8]。」と刻んだ石碑（斥和碑）を全国に立て、攘夷の意思を示した。この政策を支えたのが「衛正斥邪」の思想である。「正学である朱子学を衛り、それ以外の思想は邪学として斥ける。」とする。このことからもわかるように、朝鮮における外国への抵抗運動が守ろうとしたのは国ではなく中華の思想であった。1894 年に至り、甲午改革前後に発生した抗日義兵にしても、抵抗のイデオロギー的基盤は日本の改革により「華」が永遠に失われるかもしれないという危機意識、朱子学の名分論にあった。「彼らが守ろうとしたのは、ネーションではなく、自らが正統を引くと自負する真の中華文明、それに他ならなかった。[9]」

---

[7] 1866 年（丙寅の年）に起きた、シャーマン号事件とフランス艦隊襲撃事件の２つを指して丙寅洋擾と言う。フランス艦隊襲撃事件は、同年３月のフランス人宣教師９名の処刑についての責任追及と条約締結を目的としていたが、失敗に終わった。
[8] 武田幸男編『朝鮮史』（新版・世界各国史 2、山川出版社、2000 年）p.225 からの引用。
[9] 木村幹、前掲書 p.102 からの引用。

朝鮮は西洋各国との通商条約締結に当たっても、その実務を全面的に清に依頼している。1882年5月、朝鮮とアメリカとの間に修好通商条約が結ばれた。しかし、朝鮮政府にかわって李鴻章が対米交渉を行い、条約草案も李鴻章の指示を受けた馬建忠が作成している。朝鮮半島に欧米諸国を引き入れることで、日露を牽制しようとする清の意図があったとは言え、非常に依存的な態度であろう。

さらに清は1882年7月の壬午軍乱を機に半島へ進駐し、首都漢城を軍事制圧下に置いた。10月には李朝との間に「清国朝鮮商民水陸貿易協定」という不平等条約を締結している。そこには朝鮮が清国の属国であることが明記され、その宗属関係にもとづいて清国が朝鮮との貿易上の特権を独占することを規定している。また朝鮮政府は、清の薦める外交顧問を受け入れ、中国の制度にならった政治制度改革を行った。このように清が朝鮮に与える影響は強大なものであった。

国王の自己の領土に対する意識も低かった。それを象徴するのが巨文島事件である。1885年4月15日、南下の動きを見せるロシアの機先を制し、イギリスが突如、半島南部の多島海諸島のひとつである巨文島を占領した[10]。ここにイギリス・アジア艦隊のほとんどが集結したにも関わらず、島からも、周辺の沿岸一帯からも、政府への報告はなかった。国王と政府は日本からの連絡で占領を知るが、ほとんど関心を示さず、抗議はもちろんのこと、なんらの政治的行動もとっていない。清のイギリス・ロシア双方への働きかけによって島からイギリス軍が撤退したのは、2年後のことである。

結局、朝鮮は近代国民国家への脱皮を果たせないまま、日本の植民地へ転落することとなった。その時、韓国の総理大臣として日韓併合条約に調印し、売国奴の代名詞的存在として語られる人物に李完用[11]がいる。しかし、彼の「韓国は久しく支那の属国なり。而も支那より何等の利益を受くるなし。日本はあくまで韓国を開発せんとする方針一貫せり。是れ日本と提携するの利益たること[12]」という言葉からは、保護国となった韓国の姿をかつての朝貢国朝鮮と同一視している様子が読み取れる。

このように当時の朝鮮半島では、宗主国清の強力な影響の下で国家という意識がいまだ

---

[10] 巨文島事件については、主に呉善花『韓国併合への道』(文春新書、文藝春秋、2000年) pp.152-154を参考にした。その他、中村均『韓国巨文島にっぽん村 - 海に浮かぶ共生の風景 - 』(中公新書、中央公論社、1994年) pp.39-53に事件の経緯が詳しい。

[11] 韓末・植民地期の親日派官僚。1907年に内閣総理大臣となり、10年には日韓併合条約に韓国側を代表して調印した。(1858～1926年)

[12] 黒龍会『日韓合邦秘史』(原書房、1966年) 上 pp.266-267

芽生えていなかったことが確認できる。続いて、社会と文学の状況を概観していく。

2. 2. 開化期文学の発展

社会的背景

朝鮮王朝末期の社会にとって2つの画期となったのが、開国と甲午改革であった。

1875年、朝鮮の開国を目指す日本は、軍艦「雲揚」を半島へ派遣した。雲揚は江華水道河口に現われると、ボートを降ろし水道の遡上を行った。この日本の挑発に対する朝鮮側の発砲をきっかけに日朝の交戦がはじまる。日本は、朝鮮側の砲撃の責任を問うという口実のもとに条約の締結を迫った。翌76年、閔氏政権と日本との間で日朝修好条規が調印される。こうして朝鮮の鎖国が解かれるや、アメリカ、イギリス、ドイツなどが相次いで通商条約を結び、80年代半ばまでに鎖国政策は完全に破られた。

ふたつめの画期、甲午改革とは、1894年から1896年にかけて行われた一連の改革を指す。1894年、甲午農民戦争を機に朝鮮半島へ出兵した日本と清は、日清戦争へと突入する。その間に日本は王宮を占拠し、大院君を擁立、金弘集ら開化派官僚を中心とする親日政権を成立させた。政権は、内閣制度の創設や身分制の廃止、太陽歴の採用、断髪例の発布など政治から風俗にまで及ぶ改革を行った。これが甲午改革である。日本の干渉下ではあったが、近代化を志向する内容であったと言えよう。この2つの画期を経て朝鮮の「開化」がはじまっていく。

開化期の文学

開国に伴う外国の文物の流入で人々の生活に変化が現われるようになると、その影響は文学にも及んだ。朝鮮の歴史では一般に、日朝修好条規締結から韓国併合に至るまでの時期を開化時代、または開化期と呼ぶ[13]。ただし、文学においては甲午改革前後から韓国併合までの期間に発表された作品群を特に開化期文学と称するようである。

では、開国と近代化を背景にもつ開化期文学とはどのような文学であったのだろうか。開化期文学は大まかに2つに分けられる。開化期以前からの伝統的な題目を扱う「古代小説」と、近代化を反映した啓蒙的内容の「新小説[14]」である。ここで両者の違いをもう少し

---

[13] 李弘稙編『増補・새國史事典』(敎學社、1983年)【韓国】など参照。

[14] 全光鏞『新小説研究』(새문社、1986年)【韓国】によれば、韓国において新小説という

具体的に見てみたい[15]。まず、古代小説の大部分は「いつ・どこに・どのような人物がいた」という一律的な書き出しをとる。一方、新小説はどのような場面からでも自由に始められる。新小説は平易な日常用語である時文体の口語で書かれているが、古代小説には漢字熟語に助詞をつないだ昔からの文体が用いられている。リアルな描写も新小説の特徴のひとつである。さらに古代小説で物語の経過に沿って進行していた時間は、新小説では作者が再構成するようになった。新小説は読者と同時代を舞台にして創作されるようになった。

翻訳・翻案小説

新小説は外来文化との接触がきっかけで成立した。その「新小説」という名称からも推測できるように[16]、日本と清の影響が大きく作用している。なかでも、初期には清からの刺激が強かった。このことは朝貢国として中華文明と密接に結びつき、漢文の読み書き能力が知識人の必須条件とされた朝鮮半島の歴史的経緯からも当然と言えるであろう。しかし、日清戦争の敗戦を機に清の朝鮮支配は弱まる[17]。日本は、続く日露戦争で勝利を納めると、1905年、日韓保護条約を結んで朝鮮を保護国化した。これ以降、日本の影響が強く表れるようになる。

この時期、盛んに行われたのが、外国作品の翻訳である。特に外国の独立や建国などの歴史を扱ったものが多く、韓国をめぐる状況に対する危機意識のあらわれが読み取れる。同時に、翻訳小説が古代小説から新小説への移行に果たした役割も忘れることができない。翻訳作品は新小説にさきがけて登場し、新しい文学の練習場となったのである。

これら翻訳作品群を概観してみると『泰西新史[18]』(1897) や『瑞士建国誌[19]』(1907) な

単語が使われたのは、1907年3月17日に金相萬書舗が発行した李人稙の小説『血의淚 (血の涙)』表紙への記載が最初であるという。これに対し、李在銑『韓國開化期小說研究』(一潮閣、1972年)【韓国】は、1906年2月1日から3日付の『大韓每日申報』に掲載された日本人主宰の新聞『中央新報』発刊広告の文中に新小説という表現が見えるとしている。

[15] 以下の考察は、全光鏞、前掲書 pp.16-19 を参考にしてまとめた。

[16] 李在銑の前掲書によれば、韓国では新小説という語が1つの文学ジャンルを表わすところに特徴があるという。日本と清の場合、「新小説」は雑誌の名称にすぎなかった。

[17] 李在銑、前掲書 p.171

[18] 金秉喆『韓國近代飜譯文學史研究 (西洋文學移入史研究第一卷)』(乙酉文化社、1975年) によれば、この作品は Mackenzie の History of Nineteenth Century を原書とし、1895年5月に中国の上海広学会から『泰西近百年来大事記』という題で刊行された。同書は韓国で1897年5月に『泰西新史攬要』と改題・重刊された後、さらにハングル版に重訳されている。(p.188)

[19] 全光鏞によれば、『瑞士建国誌』は、Friedrich von Shiller 原作の戯曲、Wilhelm Tell を

ど、中国を経由してもたらされたものが目につく。その中でも抜きん出て多いのは、梁啓超の著作である。『飲氷室文集』をはじめとする諸作品が原書で読まれた他、『清国戊戌政変史[20]』(玄采訳、1900年)、『越南亡国史』(玄采訳、1906、1907年)、『中国魂[21]』(1907、1908年)などの翻訳作品[22]が発表されている。『清議報』の発售及び代售所も、韓国内に2ヶ所存在した[23]。

当時、翻訳行為は「今日開民知之第一着은莫先於訳書[24]」というほど重要視されていた。このように、言論、出版、教育、民族産業育成などの活動を通じて民族意識の高揚と国権回復をはかった民族運動を愛国啓蒙運動と呼ぶ。運動は翻訳作品が一翼を担う形で進められたが、日本はこれを「保安法」「新聞紙法」(1907年)、学会令(1908年)などによって弾圧した。やがて、運動も空しく韓国併合が行われる頃、翻訳小説に続いて「翻案」小説が登場する。翻案小説とは、原作のストーリーを利用して、人名や地名などの細部を改めた小説のことである。代表的な作品として、最も広く読まれた『雪中梅』と『長恨夢』の

中国・広東の鄭哲貫公が小説体に意訳した中国本をもとに朴殷植がハングル漢字混用文を用いて訳述したものである。(前掲書p.43)また、김병현(キムビョンヒョン)翻訳の純ハングル本も存在するようだ。2種ともに1907年に出版されている。(金秉喆、前書掲pp.238-240)

[20] 原書は梁啓超『戊戌政変記』である。(金秉喆、前書掲pp.200-202)

[21] 金秉喆によれば、『中国魂』は1907年9月、大邱広学会同人により『飲氷室文集』から抜粋・刊行されたものである。同年12月20日から翌年の11月18日まで47回に渡って心農の翻訳が『共立新報』に連載された他、1908年に張志淵の訳本も刊行されている。(前掲書、pp.249-251)一方、李在銑の前掲書(p.31)には「『中国魂』(大邱広学会訳、1907)などが単行本として訳述され」という記述があり、『飲氷室文集』からの抜粋・刊行の時点で翻訳されたのか、『共立新報』への連載に当たって翻訳されたのかは不明。

[22] 他に『匈加(牙)利愛国者葛蘇士伝』、『伊太利建国三傑伝』、『ララン夫人伝』などがある。『匈加(牙)利愛国者葛蘇士伝』は同名の原書からの翻訳で、金秉喆の前掲書には、1906年、訳者未詳で大韓自活協会の季刊誌『朝陽報』に掲載されたとだけあり(pp.218-219)、우림걸(牛林傑)『한국개화기문학과 양계초(韓国開化期文学と梁啓超)』(도서출판 박이정、2002년)【韓国】には「1908年4月、李輔相によって翻訳され、中央書館と博文書館から刊行された。」とだけある(p.71)。『伊太利建国三傑伝』は、日本の平田久纂訳『伊太利建国三傑』(1892年)をもとにしたという、梁啓超『意大利建国三傑伝』の翻訳である(金pp.245-248)。1905年～1907年の間に、新聞に抄訳が2度掲載された他、2種類の単行本も発行されている(牛p.51-65)。また『ララン夫人伝』(訳者未詳)は1907年、『大韓毎日申報』連載後、単行本が刊行された(翌年再版)。翻訳は梁啓超の『近世第一女傑・羅蘭夫人伝』(1902年)に基づくが、これは1886年に日本の春迺屋朧(坪内逍遥)が訳述・発表した『朗蘭夫人伝』(原作者未詳、一説には“グレース”)からの重訳であるという。(金pp.231-234)。その他、牛林傑の前掲書には、韓国で紹介された梁啓超作品の一覧表が掲載されているものの、牛が中国出身であるためか、日本との関連という視点が欠如している。

[23] 李在銑によれば、『清議報』の発售及び代售所は最も多い時で24縣市38個所であったが、そのうちの2ヶ所が韓国の京城と仁川にあったという。(前掲書p.31)

[24] 『皇城新聞』(光武11年6月28日)の論説による。李在銑、前掲書p.7

他、『双玉涙』、『再逢春』、『不如帰』、『貞婦怨』、『海王星』などが知られる。これらの翻案小説のうち、大多数を日本作品からの翻案や、あるいは日本語版を経由した翻案[25]が占めている。以下、上記の代表作について少々詳しくみてみたい。

翻案作品中で最も人気を博した『長恨夢』は、尾崎紅葉の『金色夜叉』を趙一斉が翻案したもので、1913年から1915年まで『毎日申報』に連載された。『雪中梅』は、末広鉄腸の同名小説をもとにした具然学の翻案で、1908年に出版された。『双玉涙』は菊池幽芳『己之罪』の趙一斉による翻案で、1912年から翌年にかけ『毎日申報』に連載された。『再逢春』は『想夫憐』(日本作家の作品とされるが、未詳)を原作に1912年に発行されている。『不如帰』は徳富蘆花の同名小説を、やはり趙一斉が1912年に翻案したものである。『貞婦怨』は黒岩涙香の訳書『捨小舟』(原作者未詳。一説には"ブラツト"[26]。)をさらに李相協が翻案、1914年から『毎日申報』に連載された。『海王星』も李相協の翻案で、黒岩涙香の『巌窟王』(デュマ Dumas Pere の『モンテクリスト伯爵 (Le Comte de Monte-Cristo)』の翻案)をもとにしている。この作品も1916年から翌年にかけて『毎日申報』へ連載された。連載予告には「翻案」という語も確認できる[27]。ただし、ここに挙げた全ての作品が『毎日申報』に掲載されている点に注意する必要があるかもしれない。『毎日申報』は韓国併合後に総督府が、併合に反抗する民族紙『大韓毎日申報』を買収し改題・発行したものである。特に日本の影響力が大きかった可能性が考えられるためである。

新小説の誕生と日本の影響

韓国の文学が翻訳・翻案から創作への階梯をのぼりつめたところに、新小説は誕生する。新小説では、李人稙の『血の涙』(1907年)『銀世界』(1908年)、安国善の『禽獣会議録』(1908年)、李海朝の『自由鐘』(1910年)がその代表的な作品とされる[28]。

最初の新小説とされるのが『血の涙』で、1906年7月から『万歳報』で50回に渡って

---

[25] 李在銑は全光鏞の示した7作品に加え『杜鵑声』と『榴花雨』という作品を挙げ「『海王星』を除外しては全てが日本小説の原作を翻案しているという点から、開化期の韓日関係の一つの性格は勿論、新小説の形成過程においての外発性を探る際にも、日本文学の至大なる影響を否定することはできないという根拠になるのである。」(前掲書 p.312)と述べている。

[26] 金秉喆、前掲書 pp.344-345 の他、金台俊著・安宇植訳『朝鮮小説史』(東洋文庫、平凡社、1975年) p.302 など参照のこと。また『朝鮮小説史』ではこれら作品の掲載紙を『大韓毎日申報』としているが、『毎日申報』の誤りであると思われる。

[27] 全光鏞、前掲書 pp.45-47

[28] 武田幸男、前掲書 p.271 参照。

連載[29]された後、1907年3月に金相萬書舗から単行本が刊行された。作者の李人稙は1900年に韓国政府の官費留学生となり、日本の東京政治学校を卒業している。この作品は、その日本語文法的な題や、漢字にルビをふる独特の文章表現、内容から、日本小説の影響が指摘されている[30]。それには、同じく李人稙の作品である『銀世界』登場人物の行動軌跡が、山田美妙の訳書『血の涙』(1903年)と酷似している[31]点が裏付けとなるかもしれない。山田の『血の涙』は、1887年にホセ・リサールが著わした『ノリ・メ・タンヘレ』の翻訳である[32]。リサールはフィリピン・ナショナリズムの父と呼ばれる人物であり、『ノリ・メ・タンヘレ』は近代フィリピン文学の最高傑作とされている。この作品は、アンダーソンが小説の具体例として用いている。彼によれば「マニラのまったく違う所に住むおたがい知りもしなければ名も与えられない数百もの人々が晩餐会のことを話している[33]」という冒頭が共同体を想像させるという。当時の韓国に、同作品が影響を及ぼしていたことは興味深い発見である。

政治風刺小説『禽獣会議録』を著わした安国善は、1894年、16歳で日本へ留学し、早稲田大学で政治学を学んでいる。また、創作の他、『比律賓戦史[34]』(1907年)の翻訳も行った。同様に李海朝も『新撰日鮮作文法』[35]を編集していることから日本語ができたと推測され、ジュール・ヴェルヌ原作『鉄世界』を森田思軒の重訳から韓国語に翻訳している(1908年)[36]。

これらの作家たちが、留学を経験したり翻訳・翻案に携わっていること、また李海朝の場合、古代小説の執筆さえ行っていることからも、新小説が古代小説から一足飛びに生じたものではないことが確認できる。

---

29 実際の連載回数は53回だが、番号の重複が3回あるため、最終回が50回となっている。(全光鏞、前掲書p.24)

30 李在銑、「新小說의 外來的 要素 -「血의 淚」와 日本小說과의 關係 - 」(前掲書所収)に詳しい。その中で李は、日本の影響を「『血の涙』(村井弦斉)+『血の涙』(ふね子)+『血の涙』(ホセ・リサール著・山田美妙訳)+『世路日記』(菊亭香水)+α→『血の涙』」という式にまとめている。(p.141)

31 李在銑、前掲書p.128

32 原書はスペイン語であるため、英語版からの重訳かと思われる。

33 アンダーソン、前掲書p.53より引用。

34 金秉喆によれば、原著者は飛人棒時で、宮本平が序を書いているという。1902年には、上海商務印書館から漢訳本も刊行されているようだ。(前掲書、pp.240-242)

35 全光鏞、前掲書p.32及びp.194参照。

36 金秉喆、前掲書pp.272-275及び、金台俊、前掲書p.299など参照。また、『鉄世界』は中国においても、1903年、包天笑の翻訳により同名で出版されている。

以上、開化期の文学を概観したが、その内容には政治的状況が多分に反映されていたことがわかる。小論では韓国のナショナリズムの誕生を、1905年に日韓保護条約が結ばれてから、1910年に韓国併合が行われるまでの時期に置くことは上述した。次節では当該期の小説の中から『越南亡国史』を取り上げ、ナショナリズムの萌芽とも言える、独立を志向する運動との関連ついて検討したい。

2. 3.『越南亡国史』と国債報償運動

『越南亡国史』について

『越南亡国史』は、ベトナム人・巣南子（1867～1940）と清国人・梁啓超（1873～1929）の合作として1905年9月に上海の広智書局から刊行された80面の小冊子である。巣南子は本名を潘佩珠といい、ベトナムの代表的な抗仏運動家である。この本は1905年、独立運動に対する援助の要請と武器購入のために日本を訪れた潘佩珠が、戊戌の政変によって日本に逃れていた梁啓超に横浜で出会い、フランスの保護国に転落したベトナムについて交わした議論をまとめたものとされる。

『越南亡国史』は中国とベトナムでも広く読まれた。中国では5版以上が刊行され、ベトナムでもしばしば複写されたほか、部分的に翻訳もなされたという。同様に、漢字文化圏である韓国へも流入した。なかには、中国でこの書籍が刊行されて1年も経たない1906年9月に済州島で読まれていたという記録もある[37]。

韓国で『越南亡国史』が広く受け入れられた理由に、撰者が梁啓超であったこと、韓国の置かれた状況がベトナムに似ていたことが挙げられる。梁啓超は当時の漢語文化圏に多大なる影響を及ぼした政治家・思想家である。韓国で彼の著作がさかんに読まれていたことは上述の通りであるが、潘佩珠もベトナムにいる頃から『戊戌政変記』、『中国魂』、『新民叢報』を読み、梁を慕っていたという[38]。

また、韓国とベトナムが置かれた状況の共通性について、梁啓超はこの本の中で「(韓国で＝筆者注) 第二のヴェトナムのごとき現象がすでに現れようとしている[39]」と述べている。そして、ベトナムと韓国の両国は、同じ中華文化圏に位置する国家であった。

---

[37] 崔起榮『韓國近代啓蒙運動研究』（韓國史研究8、一潮閣、1997年）【韓国】p.47
[38] 潘佩珠著、長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史他』（東洋文庫、平凡社、1966年）p.236
[39] 潘佩珠、前掲書p16の翻訳文より引用。

もちろん、韓国語への翻訳も行われた。韓国で刊行された『越南亡国史』の翻訳本は、国漢文[40]本1種とハングル本2種の3種がある。ただし、すべてが原文からの翻訳ではなくハングル本2種は国漢文本からの重訳であった[41]。玄采によって翻訳がなされた国漢文本には、原本にない記述が付け加えられている。周時経[42]と李相益[43]が手がけた2種類のハングル本[44]も、この付加部分を踏襲していることから国漢文本の重訳であることがわかる。

翻訳者の玄采[45]は1855年、川寧玄氏の二代独子として生まれた。川寧玄氏は中人階層として、訳科・医科などのさまざまな技術者を生んだ家系である。玄采も17歳で漢学の訳科に合格している。その後は主に学部編輯局に在職しながら、韓国史と世界史、韓国地理などについての著述と翻訳に尽力した。玄采は独立協会[46]にも参加しており、その姿には、民衆の啓蒙を目指す姿勢が一貫している。

玄采による国漢文本は、原本から「越南小志」を除外し、「越法両国交渉」・「滅国新論」・「日本の朝鮮」と、「越南提督劉永福檄文」を付録として収録している。「越南小志」はベトナムと清国、フランス間の外交関係を説明した文章である。「越法両国交渉」は原本の付録である「越南小志」中の「與法国之交渉」の翻訳であった。梁はこの論文でベトナムとフランスが締結した条約や、フランスのベトナムに対する措置を紹介し、外勢の侵略を警戒している。「滅国新論」は『飲氷室文集』に収録され、当時韓国でも注目を集めていた「滅国新法論」の翻訳であった。また、「日本の朝鮮」は「日本之朝鮮」の翻訳である。この「日本之朝鮮」は、韓国政府の一進会弾圧を阻止するために日本軍が1904年12月末から1905年1月初め、ソウル市内の治安を掌握した事件を批難する内容である。「越南提督劉永福檄文」は清国の将帥でベトナムで活躍した劉永福がベトナム人の反仏活動を督励した檄文を

---

40 国漢文とは、漢字とハングルの混用文を言うが、印象としては、漢文にハングルで助詞を加えただけの状態に近い。

41 金秉喆、前掲書pp.215-217ではハングル本も原著からの翻訳であるとし、特に周時経の訳文を美文と称えているが、誤りである。

42 周時経（1876～1914）は有名な国語学者であり、『独立新聞』の発刊にも関与した。

43 李相益（1881～？）はハーグへ遣わされた密使、李相卨（1870～1917）の実弟で、各種学校の教員を歴任した教育者であった。

44 周時経の翻訳は1907年10月に、李相益の翻訳は、玄采の息子・玄公廉が校閲及び発行を引き受けて1907年12月に刊行された。また、周時経の本は刊行後、4ヶ月で再刊され、再び2ヶ月後に三刊された。金秉喆、前掲書pp.215-217及び崔起榮の前掲書参照。

45 玄采については、澤田哲「開化期の教科書編纂者としての玄采」（韓国研究院の季刊誌『韓』第109号、1988年所収）に詳しい。

46 1896年に開化派官僚を中心として結成された政治結社。『独立新聞』がその機関紙的役割を担った。98年12月、軍事弾圧を受けて解散するが、会員からは後の愛国啓蒙運動・独立運動の活動家を輩出し、民族主義運動の出発点となった。

そのまま収録したものであった。ただし、この檄文は初版本だけにしか収録されていない。

この玄采の翻訳本で最も目を引くのが「記越南亡人之言」に付け加えられた部分である。この部分は「朝鮮亡国史略」をもとにしていると考えられ、日本の韓国侵略過程が詳しく述べられている。「朝鮮亡国史略」は梁啓超が 1904 年 9、10 月の『新民叢報』第 53、54 号に発表し、『飲氷室文集』の改訂版に収録された。

『越南亡国史』の受容と国債報償運動

韓国で『越南亡国史』が翻訳されたのは、1906 年 8 月 28 から 9 月 5 日にかけて『皇城新聞』に掲載された「読越南亡国史」という文章が最初である。これは『越南亡国史』の部分訳であった。掲載の 2 ヶ月後、1906 年 11 月、玄采によって国漢文訳『越南亡国史』が刊行される。

翌 1907 年 2 月 21 日、『大韓毎日申報』に「国債一千三百万円報償趣旨」という文章が掲載され、国債報償運動がはじまる。国債報償運動とは、全国民から募金を集め、日本からの借款を返済しようという活動である。この頃、大韓帝国政府が日本から導入した借款は 1300 万円に達していた[47]。運動は、これを償還することで経済的独立の達成を目指した。

発起人をはじめ、国債報償運動への積極的参加者の大部分が『越南亡国史』の出版に関係した人物であった。新聞への趣旨書発表に先立つ 2 月 16 日、大邱・広文社の副社長徐相敦の呼びかけによって、同社社長金光済をはじめとする国債報償期成会の仲間たちは報償運動の実行と、方法を決議した。方法とは、2 千万人民が 3 ヶ月の間禁煙し、煙草代をひとり月 20 銭ずつ集めるというものであった。金光済の議案を受理した大韓自強会[48]も、国債報償運動に積極的に参加した。自強会の『月報』第 9 号は論説欄で「断烟償債問題」を論じ、雑録欄の 15 面を割いて運動の取り組みを称讃している。国債報償運動を発案した大邱・広文社では、まさに運動の展開中に『越南亡国史』を刊行しているが、その序文を書いた張相轍は発起人のひとりである。訳者の玄采もやはり、独立協会員であり積極的参加者であった。また金相萬・高裕相・朱翰栄書肆といった販売所は義捐金収銭所を担当した。

運動は速やかに各地に広がり、4 月末までに 4 万余名の国民が募金に参加し、5 月末までには募金額が 230 万円に達した。

---

[47] 当時の韓国の国家予算は歳入が 1319 万円、歳出が 1396 万円という 77 万円の赤字予算であった。柳永烈『大韓帝國期의 民族運動』(一潮閣、1997 年)【韓国】p.150

[48] 1906 年創設に創設された全国的な愛国啓蒙団体。1907 年に弾圧を受けて解散後、後続団体として大韓協会が設立された。

大韓自強会とともに運動の中心を担った『大韓毎日申報』は、日本の干渉を避けるためイギリス人ベセル[49]を社長にすえ、反日の論陣を張っていた。募金運動が全国に広まると、これを排日運動と見なした統監府によって『大韓毎日申報』主筆の梁起鐸が拘束されるなどの弾圧が加えられ[50]、運動を中止せざるを得なくなってしまった。

話を『越南亡国史』に戻すと、1907年7月、玄采が編集した『幼年必読釈義（下編）』に全文が転載されている。『幼年必読釈義』は『幼年必読』という初等用教科書に対する教師用指導書であり、全国の学校で『越南亡国史』が紹介されたり、教科書として使用されたものと考えられる。続いて1907年10月、12月と相次いで2種のハングル版『越南亡国史』が刊行された。

しかし、1909年5月7日、政府の内部告示第27号により、治安妨害を理由に発売と頒布が禁止される。押収は5月6日の午前から始められ、この年の5月から12月までの7ヶ月間に832冊もの『越南亡国史』が押収されている。また、『幼年必読』『幼年必読釈義』も同様の弾圧を受けた[51]。『越南亡国史』は取締りのほぼ1年前にあたる1908年7月にすでに警務庁の調査を受けている。このことからも、社会に対していかに重大な影響を与えたかが推測される。

3. まとめ

出版はナショナリズム発生の要因となり得るか

以上の考察から、小説が同時性の概念を生み出したとするアンダーソンの主張は、今回の韓国の場合と合致すると言えるのかもしれない。かつての小説においては物語は時間の経過に沿って進行していた。ところが新小説では、作者が時間を再構成するようになった。さらに新小説は読者と同時代を舞台にして創作されるようになったのである。

アンダーソンの『想像の共同体』は、それまでのナショナリズム論をひっくり返して古典となった。ただし、池内恵が言うように「「出版資本主義」（中略）といった概念は、彼

---

[49] Ernest T. Bethellと当時の新聞の発行状況については、F.A.マッケンジー著、渡部学訳注『朝鮮の悲劇』（東洋文庫、平凡社、1972年）「第19章 外国人の批判に対する隠蔽策」の記述が興味深い。

[50] 韓永愚著、吉田光男訳『韓国社会の歴史』（明石書店、2003年）p.508参照。また、梁起鐸（1871～1938）はベセルとともに『大韓毎日申報』を創刊した人物で、同紙の主筆として抗日思想を鼓吹した。

[51] 禁書処分を受けた『幼年必読釈義』は312冊が押収されている。牛林傑、前掲書p.50

の文章の中に置かれると不思議な生命力や普遍性を発するのだが、他人が一般理論として応用しようとすると、たちまち魔力は消えうせ、表層的で陳腐な図式と化す。便利で操作可能な概念にみえながら、実際には東南アジア近代史の固有の文脈を読み解く著者自身のごく私的な視座と、切り離すことはできない[52]」。言い換えれば、アンダーソンの理論はすべてのケースに当てはまるわけではないということである。

韓国の場合、国債報償運動などに垣間見られる国民意識の形成において、創作小説よりも、その前段階としての翻訳・翻案小説が果たした役割が大きかった。そのひとつの例が『越南亡国史』である。韓国の場合、ナショナリズムの形成を促したのは純粋に小説が持つ機能だけではなく、現実の政治的利害であったと言えよう。

『越南亡国史』は、その存在に韓国ナショナリズムの形成過程を反映している。まず、初版に収録されていた清の将帥の檄文が第2版以降削除されている。これは、かつて国民性の理想であった清を他国と見なす考え方の出現を意味し、宗属関係にあった清からの自立意識の芽生えが読み取れる。また、国漢文本とそれをもとにしたハングル本には、日本の韓国侵略過程を詳しく述べた文章が付け加えられた。ここに翻訳者の強い愛国啓蒙的意志の表れが見て取れる。さらに、最初に国漢文でなされた翻訳が、のちに純ハングルに改められている。これもナショナリズムの担い手の拡大を想像させる。ただ、この純ハングル文の問題に関して、今回は触れることができなかった。国民の統一に言語が果たす役割についても考察が求められよう。同様に、ある小説と、その小説が連載された新聞各紙の性格との関連性も興味深いテーマである。これらを検討することは、今後の残された課題であると思われる。

---

52 池内恵による書評（アンダーソン『比較の亡霊』）、「読売新聞」2005年12月18日朝刊より引用。